



公望可定印全集

第二十六卷



谷崎潤一郎全集 第二十六卷

定價一五〇〇圓

昭和四十三年十月十一日印刷  
昭和四十三年十月二十五日發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一  
電話（五六一）五九二一  
振替東京三四

谷崎潤一郎全集 第二十六卷

新々訳源氏物語 卷二

目次

蓬生

一

関屋

元

絵合

七

松風

九

薄雲

八五

槿

三

乙女

四

玉鬘

一〇一

初音

四

胡蝶

二五

螢

二八

常夏

三三

篝火

三九

野分

三四

行幸

三七

藤袴

三九

真木柱

四九

梅枝

四三

藤裏葉

四七

蓬  
生



蓬生

イ、わくらばに問ふ人  
あらば須臾の浦に藻  
塩垂れつつ侘ぶと答  
へよ〔古今集〕  
ロ、紫の上

蓬生

ハ、末摘花

ニ、「末摘花」二一四  
頁以下参照

「藻しほたれつつ」侘びしく過していらした頃、都でもさまざまに歎いていらっしやる人が多かったのですが、それでも身の寄り所のある方々は、ただ恋しいという一筋の思いに悩んだだけなので、二条の上などもお氣樂に、配所の方ともしげしげおん文の遣り取りをなさりながら、官位を失い給うたお人の、仮初のおん装束などをも、世の憂きふしの折々につけて送ってお上げになったりして、心を慰めていらしたのです。それにひきかえて、なかなか君の思い人とは世にも知られず、お旅立ちになった時の御様子をも、餘所ながら噂に聞いて想像しつつ、切ない思いを胸のうちに包んでいたというような人々も多いのです。

常陸宮の姫君は、父親王がおくれなさいました後は、ほかにお世話申し上げる人もないお身の上で、ひどく心細そうにしていらっしやいましたのを、思いがけない行きが

かりからお通いなさるようになって、ずっとつづいていましたので、君の御威勢から言  
 えば、ほんに何でもない、ちよっとしたお情をおかけになったおつもりなのでしたが、  
 お待ち受けになるお方の、見るかげもない御境涯では、大空の星の光を鹽の水に映した  
 心地で、過していらっしやいますうちに、ああいう騒ぎが起つて来まして、君も浮世の  
 あらゆることが厭におなりになったりしたお取込みの中で、特に深くもおありにならな  
 い人たちのことなどは、お忘れなされたようになって、遠く田舎へお出かけになりました  
 てから後は、わざわざおたよりもしてお上げになりません。当座の間は泣きながらも暮  
 していらっしやいましたものの、年月を経るにつれまして、しみじみと寂しいおん有様  
 になって行かれます。古い女房たちなどは、「やっぱり御運勢が拙くつていらっしやっ  
 たのですね。一時は思いがけなく神佛が出現なさったような風で、人はこういう仕合せ  
 な御縁を引き出すこともあるものかと、珍しく存じ上げておりましたのに、おしなべて  
 の世の習わしとは申しながら、ほかに頼るお方もいらっしやらないおん有様とは、何と  
 いう情ないことでしょうか」と、呟いて歎くのでした。貧しいなりに暮していたこの年  
 月は、言いようのない寂しさに馴れて過していらっしやいましたのに、なまじ中途で少  
 少ばかり世間並みな暮しを覚えたために、あとが一層堪えがたく感じられて歎くのです。  
 少しは嗜みのある女房たちも自然寄り集っていたのですけれども、皆つぎつぎにあら

こちらに散ってしまいました。中には死ぬ者もあったりしまして、月日が立つに従って上下の人数が減って行きます。もともと荒れていました御殿のうかが、ひとしお狐の棲み家になりました、無気味に、森閑と生い茂った木立ちの奥に梟が啼きますのを、朝夕耳にするようになりますと、これまでは人氣がありましたからこそ、そういうものもそれに壓されて姿を隠していたのですが、今は木霊などという怪しい物どもが所を得て、次第に形を現わし、いろいろ佻びしいことばかりが起って来ますのに、たまたま残って仕えています侍女たちは、「もうたまりません。この頃受領などの、面白い家造りを好みます者が、この御殿の木立ちに目をつけてまして、お手放しになりませんか、つてを求めて申し込んで参るのがございますが、そう遊ばして、かような世にも恐ろしい所でないお住居へお移りなさりませ。ここではお側に残っております者も、とても辛抱がなりかねます」などと申し上げるのですけれども、「まあ、ひどい。世間の思わくもあることですし、私が生きています間は、どうしてそんな昔を忘れたことができません。こんな恐ろしく荒れ果てましたけれども、親のおん面影がとどまっているなつかしい住みかだと思えば、どんなに慰められることか」と、泣くばかりで、夢にもそんなことはお考えになりません。おん調度の類も、たいそう時代のついた、手馴れた品々で、昔風に、立派にできていますのを、生物識りの風流がった男などが手に入れたがって、誰

某の名人にわざわざ作らせ給うたと聞き出して来ては、案内を乞うて、ああ貧乏でいらつしゃつたらと、侮りながら申し込みますと、例の女房たちは、仕様がな、物を売り払ったりすることも、世間にはよくあることだからとうまく取り計らって、目前にさし迫った暮しの辻褄を合わせようとする時もあるのですが、きつくお叱りになりまして、「私が使うようにとお思いなさればこそ、拵えておおきになったのです。何として輕々しい身分の者などの、家の飾りにさせましようぞ。亡きおん方の御本意に背いては申しわけがありません」と仰せられて、そういうことはおさせになりません。ついちよつとしたことにでも訪ねて来てくれる人もないお身の上で、ただ兄君の禪師の君ばかりが、たまに京に出ていらつしゃる時にはお立ち寄りになりますけれども、それも珍しく古風なお人で、同じ法師という中でも、寄るべのない、浮世ばなれのした聖でいらつしゃいまして、ぼうぼうと伸びた草や蓬を刈り取ったらばというほどのことをさえ、思いついても下さいません。そんなわけなので、浅茅は庭の面も見えないように茂り、蓬は軒と高さを争って伸びています。葎が西東の御門を、しっかり閉じ固めてくれたところは用心がよいのですけれども、崩れがちな周囲の築地は馬牛などの踏み馴らした通り路になって、春から夏には、牧童が放し飼いをする不埒さです。八月の野分が吹き荒れました年に、廊なども倒れ、雑舎の粗末な板葺であった建物などは、骨組ばかりが僅かに残り

イロ、当時の物語であるが、今伝わらない、竹取物語のこと

まして、今では下司も踏みとどまって住んではおりません。朝夕のけぶりも絶えて、哀れにみじめなことが多いのでした。盗人などという向う見ずな輩も、見つきが寂しいからでしょうか、この御殿ばかりは用のないものとして、通り過して、寄りつきもしませんので、そういう凄惨な野ら敷ですけれども、さすがに寢殿の内だけは、昔のままの飾りつけがしてありますが、つやつやと拭き掃除などをする人もいません。塵は積りながらも、確かにそれと頷かれる麗しいお住まいには違いないので、その中に明かし暮していらっしやいます。

はかない古い歌や物語のようなものを相手にしてこそ、つれづれをも紛らわし、こういう住まいのやるせなさも慰められるものなのですが、さような方面の嗜みにも後れいらっしやるのです。たつて好ましいことではありませんが、自然退屈な時などには、同じ心の者同士で文の遣り取りなどをしましてこそ、若い人は折々の本草の風情につけても、憂いをお忘れになるはずなのに、親御がお育てになったしきたりをそのままに、世間を気の置けるものと思っておいでなされて、たまにはお便りをなさらねばならない方々へも、さっぱり馴れ馴れしくなさいません。古ぼけた御厨子を開けて、唐守、藐姑射の刀自、赫奕姫の物語の絵に画いたのを、ときどき弄び物にしていらっしやいます。

古い歌でも面白いのを選び出して、題だの読人だのを明らかにして説いてあるのは見所

イ、京都の北郊にある  
紙屋川で漉いた紙  
ヲ、檀紙。イも口もと  
もに儀式ばった紙で  
風流気のないもの

もあります。模様が、紙屋紙や陸奥紙などのぶくぶくしたのに、誰でも知っている  
古歌を書いたのなどは、ひどく無趣味なものです。に、よくよくお寂しい折々には、そ  
んなものをひろげていらっしゃいます。今の世の流行である読経や勤行などということ  
は、たいそう気恥かしくお思ひになつていらして、世話をして上げる人もないのです  
けれども、数珠などを取り寄せ給うでもありません。そういつたように万事が几帳面で  
いらっしゃるのでした。

侍従とやら言いましたおん乳母の娘だけは、長年のあいだどこへ行こうともせず仕  
えていましたけれども、掛け持ちで通つていました斎院がお亡くなりになつたりしまし  
て、たまらなく心細がつています折から、この姫君の母北の方の妹で、零落して受領の  
妻になり下つていらっしゃる方がありました。娘どもを養育してゐまして、みめよい若  
い人々を抱えたがつていますので、全く知らない所よりは、親の代にも奉公したことが  
あつたのだからと思つて、ときどきそちらへ通つてゐます。姫君はそういう人馴れない  
お方ですから、そんな人たちと親しい交際もなさいません。叔母君は「故姉君は私を馬  
鹿になすつて、御自分のお顔にかかわるようになつておいででしたから、姫君のお氣の  
毒な御事情は分つていますが、わざとお見舞いにも伺いません」などと、侍従に向つて  
憎まれ口をききながらも、おりおりは音信をするのでした。生れつきからそういう平凡

な身分の人は、かえっていい人の真似まねをしようと心がけて、上品ぶるのも多いのですが、貴い血筋を受けながら、こんなにまで落ちぶれる人はそういう宿世すくせがあるのでしょうか、少し心に卑しいところのある叔母君なのでした。自分の地位が低いために見下げられていましたについては、何とかしてこういう成り行きにつけ込んで、あの姫君を内の娘どもの召使にしてやりたいものだ、性質などに時勢おくれのところはあるが、あれなら安心して世話役を頼める、と考えまして、「ときどきはこちらへお越しになって下さいまし。お琴を聞かしていただきたく思っている人もおりますから」と言って来るのでした。侍従も始終そう言ってすすめるのですけれども、格別意地を張るというのではなくて、ただ恐ろしい引っ込み思案のお方ですから、それほど親しくなさいませんのを、先はいまいました。が、っているのです。

そうするうちに、この叔母君の主人あるじが太宰大式だざいのうしきになりました。娘どもを皆それぞれに縁づけておいて下向しようとするのです。やはり何とかしてこの姫君を誘い出そうと考えまして、「今度遠国へ参りますにつきましては、心細いおん有様が気にかかってなりません。この年ごろは御無沙汰をしておりましたとは申せ、御近所に住んでおりました間は安心でございましたが、これから後はほんとうにどうなさいますやら」などと、言葉巧みに持ちかけて来るのですが、一向承知なさいませないので、「まあ憎らしい、もっ

たいぶって。御自分一人で己惚れておいでになっても、あんな藪原やぶはらの中に幾年も住んでいらっしやるような人を、何で大將殿が大切にお思い申されましようぞ」などとけちをつけるのでした。それから間もなく世間の思わく通り君は都にお歸りになり、天あめが下に歓よろこびの聲が満ち溢あふれます。何とかして人より先に自分の深い志を見ていただきたいとばかり、競い合う男や女や、身分の高いのや低いのや、さまざま人の心を御覧になりまして、いろいろと世の中の表裏をお悟りになります。それやこれやのお忙しさで、この姫君のことなどはさっぱり思い出して下さりそうな様子もなくて、月日が過ぎて行くのでした。あゝ、もう望みも空むなしくなった、年ごろ君がおいたわしいおん有様でいらしたのを、えらく悲しいことに存じ上げながらも、再び萌もえ出でずる春にお遇あいになるようにと祈りつづけていたのに、下様しもさまの者どもまでが喜び合う時勢になって、君も立派な官位におつきになったりするのを、今は他人事ひとごとのように聞いていなければならぬ、都を落ちていらした折の憂うれさ辛つらさは、ただ自分一人が負うために起ったことのように感ぜられたのに、そのかいもない世であったと、急にがっかりして、恨めしく悲しくて、人知れず声をあげて泣いてばかりおいでになります。大弔の北の方は、それ見たことか、あんな風に独ひとりぼっちで、みすばらしい御様子をしておられるものを、相手になさる人があるものか、佛ほとけや聖ひじりも罪の軽い人をこそ導いて下さるのだ、あんなおん有様で、まだ